

平成 30 年 5 月 28 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H05180

研究課題名(和文)有機農業の新しい市場戦略：国際比較研究

研究課題名(英文)New Market Strategies in Organic Agriculture

研究代表者

松原 隆一郎 (MATSUBARA, Ryuichiro)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：90181750

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,820,000円

研究成果の概要(和文)：イタリア南部の有機農業は、独立した経営方針にもとづいた戦略を有する一方で、関係者相互の緊密な連携により、基本的哲学と情報を共有することによって市場志向の大規模アグリビジネスに対応している。デンマークでは、農家・酪農家間の堆肥およびエネルギー循環の仕組みとその発展に見られるように、成熟した市場と政府を前提とした自律的な地域コミュニティを軸とする制度設計が観察される。これら二つのモデルは、日本、フィリピン、メキシコのような有機農業後発国では、地方分権化を推進し、緊密なコミュニティ関係を活用すれば、小規模な生産者にあっても持続可能な農業経営が可能であることを示唆している。

研究成果の概要(英文)：In the South Italy, the small-scale organic farmers and distributors, which possess different management policies and strategies, can protect their activities against the large scale market-oriented agribusiness actors, by sharing the basic agriculture philosophy and information based on their close-knit relationships. On the other hand, in Denmark, as the recycling-oriented system of manures and energy between farmers and dairy farmers shows, a peculiar autonomous mechanism based on its matured market and government is designed. These cases suggest that even small-scale organic farmers in organic agriculture late comers such as Japan, Philippines and Mexico can enjoy sustainable management if the decentralization is promoted and rich community resources are well utilized.

研究分野：社会経済学

キーワード：有機農業 イタリア デンマーク コミュニティ フィリピン メキシコ グローバル化

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の当初の背景としては、以下の3つの論点を参加者全員が共有したということに集約できる。第1には、悪しき競争主義における病弊を是正する「新しい公共資本」(松原:2011)として、有機農業を明確に位置づけることが可能であるという理解である。すなわち、これまでの研究代表者、研究分担者、連携研究者の研究から、A.スミスの『道徳感情論』における「共感」を基礎とする社会ネットワークの重要性の認識が必要であり、参加主体間に緊密な人間関係を必要とし、またそれを育む有機農業にその意義を確認できると考えられるのである。

(2) 第2には、大陸東南アジア高地民社会における高地民の国家をかわす優れた戦略が、国家・市場と有機農業の関係を考える際に多くの示唆を与えるという理解である。中国南部辺境と大陸東南アジア諸国の国境沿いの広大な山岳地帯 *Zomia* には、総人口1億に及び多様な高地少数民族が、中国や周辺王国による支配から逃れ、「統治されない」政治体を作りあげてきた。高地民は、「市場」において小規模な商取引を行いつつも、「市場」に飲み込まれることなく最近まで固有の文化と一定の生活水準を維持できた理由である。それは、たとえば有機農業の「市場化」のための有機認証の問題を考える際、有用である。自給自足を目的とした自然農法では、認証は全く意味を持たないし、顔の見える関係を対象とした有機農業の場合も認証は不要であるが、有機農業の持続性と近い将来のGM作物の台頭の可能性を鑑みると、今後は、顕名度より低い市場、つまり領域の広い市場への対応を積極的に捉え直し、新たな対抗戦略を提示する必要があるからである。

(3) 最後に、大手アグリビジネスの経営戦略を分割統治として解釈すると、有機農業においては農業者間の有機農業技術などの伝播過程を社会ネットワークの深化と捉え、有機農業の意義をより立体的に理解することが可能であるとの予想があげられる。すなわち、科学的農業は、しばしば知的所有権保護のための相互監視制度などを通じて、戦略的に農民間人間関係を断絶させ得るが、有機農業の導入は、種子交換や情報交換を活発化させ、切断された農民間の社会ネットワークを再生し、この種の分割統治への対抗戦略となり得るであろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、イタリアをはじめとする欧州の有機農業に固有な発展戦略に着目することによって、有機農業の後発国を対象に、グローバル化に対応し得る戦略的な生産・流通制度の枠組みを構築することである。ここで、本研究は、有機農業が、単に化学肥料や農薬の投入を抑制し、在来種子の保全や少量

多品種の実践によって環境保全を実現するだけでなく、農民の主体性や種子選択の自由の復活と農民間の交流の活発化をもたらす事実に着目する。有機農業は、農家経営の観点からも、社会ネットワークの観点からも、農民の福祉向上に寄与し得るのである。しかし、グローバル化の中で有機農業の維持・発展を可能とするためには、農産物の生産・流通制度のさらなる変革が求められている。本研究はこのような有機農業の喫緊の課題を解決することに資する。

3. 研究の方法

本研究は、有機農業における生産・流通過程の国際比較研究である。有機農産物流通経路を、(1)有機農産物の輸出を戦略的に行ってきたと思われるイタリア、(2)「産消提携」を核とする日本、(3)生産者と消費者のコミュニティ内の流通にとどまる傾向が残るフィリピンとメキシコというように、有機農業の普及・発展段階に応じて分類し、その上で、先進的なイタリアをはじめとする欧州の経験を参照しながら、(a)有機農民の世帯調査から得られたデータ(個別農家経営、技術伝播過程における社会ネットワーク、及び農慣行の変化)と(b)有機農産物の流通経路をトレースすることによって、流通業者調査から得られたデータ(有機農産物の在庫管理、需給調整、価格決定、販売量、販売額)のそれぞれを分析することによって、有機農産物の戦略的な生産・流通制度の設計を立案したい。

4. 研究成果

(1) 本研究では、まず、(1)イタリア、ドイツおよびスペインにおける有機農産物の流通市場における実態調査によって、本研究の比較対象軸を定め、(2)有機農業の生産過程における社会ネットワークと各地域における有機農産物市場の諸条件を検討し、新しい基本仮説を導いた。欧州にあっても最大レベルの規模の有機農業耕作地面積を有するイタリアでは、その生産地は中部や南部に集中しているのに対して、消費市場はミラノ市が立地する北部に偏っている。イタリアの有機農業は、国内の地域内市場を重視しつつも、国際市場をも見据えた複眼的な市場戦略によって発展してきたという作業仮説を、生産者および流通業者への面接調査によって確認、傍証することができた。他方、ドイツは、有機農業について、世界において最も先進的であり、*demeter* 認証基準や国際有機農業推進連盟(IFOAM)ほかの機関が有機農業発展の推進力となってきた経緯をもち、欧州最大規模の有機市場を有している。スペインは、これら2国の中間にあたり、近年、急激に、生産および消費を拡大してきたが、他方において、その対局にある遺伝子組換えトウモロコシの商業栽培を行っているという複雑な国内事情がある。この点でスペインは、フィリピンやメキシコと共通性を有してい

る。

以上の事実発見をふまえ、EUを「一国」として捉えるとき、アジアやラテン・アメリカ地域への適用を考える際に、グローバル化が進む国際市場の中での域内分業を軸とする新たな有機農業の市場戦略を提示することができる。

(2) この間の欧州の有機農業調査から、イタリア南部と北欧デンマークが、きわめて対照的な、しかし、フィリピン、メキシコ、そして日本の有機農業の市場戦略を考える上で重要な事例であることが新たにわかった。そこで、まずイタリアのシチリア島における生産者、流通両面の取り組みについて、有機農産物の在庫管理、需給調整、価格決定、販売量、販売額などのデータを収集し、国際比較を行い、次のような結果を得た。すなわち、シチリア島カタニャとパレルモにおける生産者、流通業者および小売り業者の市場戦略に固有な特徴は、基本的哲学を共有しながらも独立した経営方針（社会事業とのリンク、自然農法、技術開発、海外輸出中心など）にもとづいて独立の戦略を採っているものの、他方で、関係者相互が緊密に連携し、情報を共有している。このために、小規模な生産者であっても、持続可能性の高い農業経営が可能である。

日本においては、従来は「産消提携」志向型が代表的であったが、市場志向型に向かう生産者も増えている現状に鑑みると、それは重要な示唆を有する。その代表例が、北海道の有機酪農である。同様な性向は、フィリピンやメキシコについても観察されるものの、それは、主としてNGO主導によるものである。遺伝子組換え種への対応が地方レベルに任されていることも影響しているものの、参加型有機認証制度(Participatory Guarantee System)が普及している地域においては、州内の情報共有システムが生まれ、局地的市場圏(Local Market Area)の発展の萌芽に結びついているという観察を得ることができた。そこで、生産者、流通業者および消費者間の社会ネットワークを通じた技術や情報の伝播過程に着目し、その経緯と発展の可能性についての分析をフィリピンについて展開し、「イタリア・モデル」の地方(region)レベルの妥当性を検証することができた。

(3) 西欧(イタリア)、東南アジア(フィリピン)、ラテン・アメリカ(メキシコ)、日本の有機農業の発展を考える上で、北欧諸国の有機農業における関連業者の市場戦略と政府の対応が、重要な意義を有することが判明した。そこで、つぎにデンマークにおいて、農家、酪農家、バイオマス関連産業、流通業者および政府の連関に関する集中的な文献調査および現地調査を計画・実施した。この結果、コミュニティ内の社会関係を土台として、デンマークにおいて形成された、

農家・酪農家間の堆肥およびエネルギー循環の仕組みとその発展経路が、グローバル化に対応する基本戦略になり得る事例であることがあきらかとなった。それは、小国ゆえのきめ細やかな行政対応を前提とした地域コミュニティの自律的な制度である。市場メカニズムによる資源配分システムとは一線を画した、個々のコミュニティの社会関係を軸とした制度設計がなされており、小規模ながら同様の機能を重視してきた研究対象国の有機農家や有機農業関連業者が、ともすると独立した小規模集落による生活単位に収束しがちであったことと対照的である。その高いパフォーマンスは、高い生産性、強い国際競争力、豊かな人間関係にもとづく高い幸福度にも貢献していると解釈し得るものであり、対象国経済全体にも大きな示唆を与えるものであることがあきらかになった。松原(2017)の社会経済論の包括的論考や、地域通貨と貧困における有機農業の意義に言及した中西(Nakanishi:2018)が示唆するように、西欧型モデルと北欧型モデルの意義について、今後、いっそうの精緻化と研究の発展をはかりたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計18件)

矢坂雅充(2018),「農業生産者の組織化:揺れ動く生産者組織」,『明日の食品産業』,484号,3~5頁,査読無.

矢坂雅充(2017),「畜産経営安定法改正による生乳流通制度改革」,『農業と経済』,83巻第10号,108~120頁,査読無.

矢坂雅充(2017),「日EU・EPAと国産乳製品・原料乳」,『デーリイマン』第67巻第9号,2017年9月,査読無.

矢坂雅充(2017),「農業経営収入保険制度の創設-畜産・酪農に与える影響と課題」,『農村と都市をむすぶ』,第67巻第7号,789号,22~23頁,2017年7月,査読無.

受田宏之(2017),「援助は「悪」をなくせるのか:南北アメリカにおける麻薬対策」,『東洋文化』第97号,2017年3月,77~98頁,査読有.

受田宏之(2017),「アグロエコロジーは遺伝子関連技術のオルタナティブになり得るか:小農運動とアグロエコロジー」,『農業と経済』,第83巻第2号,2017年3月,158~164頁,査読無.

受田宏之(2017),「ロペス=オブラドールとは何者なのか メキシコ2018年総選挙の展望」,『ラテンアメリカ時報』,2017年秋号,32~34頁,査読無.

受田宏之・宮地隆廣(2017),「メキシコの麻薬戦争と民衆歌謡 ナルココリードから社会規範を読み解く」,『アジア研ワールド・トレンド』,第261号,4~7頁,査読無.

矢坂雅充(2016),「生乳取引・流通の現状

と課題(下)」、『NOSAI』, 第 68 巻第 10 号, 33~43 頁, 2016 年 10 月, 査読無.

矢坂雅充(2016), 「統計に見る酪農の姿」『デーリイマン』66-10, 2016 年 10 月, 査読無.

矢坂雅充(2016), 「農産物・食品輸出拡大の検証」『農村と都市をむすぶ』, 第 66 巻第 10 号, 第 780 号, 4~5 頁, 2016 年 10 月, 査読無.

矢坂雅充(2016), 「生乳取引・流通の現状と課題(中)」, 『NOSAI』, 第 68 巻 9 号, 31~54 頁, 2016 年 9 月, 査読無.

矢坂雅充(2016), 「生乳流通問題とは何か」, 『農業と経済』, 第 82 巻 9 号, 88~19 頁, 2016 年 9 月, 査読無.

矢坂雅充(2016), 「生乳取引・流通の現状と課題(上)」, 『NOSAI』, 第 68 巻 8 号, 31~48 頁, 2016 年 8 月, 査読無.

Nakanishi, Toru (2016), “Book Review: William Easterly, *The Tyranny of Experts: Economists, Dictators, and the Forgotten Rights of the Poor*,” *Developing Economies*, Vol.54 No.2, May 2016, pp.198-201.

矢坂雅充(2016), 「育児用粉乳の輸出」, 『農村と都市をむすぶ』, 第 66 巻 第 10 号, 780 号, 50~57 頁, 2016 年 10 月, 査読無.

受田宏之(2016), 「小農と有機農業の普及ネットワーク メキシコにおける参加型認証の事例」『ラテン・アメリカ論集』第 50 号, 2016 年 12 月, 33~59 頁, 査読有.

矢坂雅充(2015), 「有機酪農の到達点と未来」, 『農村と都市をむすぶ』, 第 65 巻 第 12 号, 770 号, 34~44 頁, 査読無.

[学会発表](計 10 件)

Nakanishi, Toru (2018), “Economics of *Momo*: Poverty and Money,” *25th Sustainable Shared Growth Seminar: Community Currencies and Sustainable Shared Growth*, The University of the Philippine, Los Banos, Philippines, 2018 年 3 月 21 日.

矢坂雅充(2018), 「EU の「ミルクパッケージ」と生産者の組織化」, 畜産経営経済研究会(招待講演).

松原隆一郎(2017), 「基調講演: 無電柱化推進に向け取り組むべき施策の方向性について」『無電柱化推進法を受けた取組』, 第 32 回日本道路会議), 都市センターホテル 2017 年 10 月 31 日.

受田宏之(2017), 「先住民とインフォーマリティ 主流から外れたものからみるメキシコ経済の変容」, 『第 54 回ラテン・アメリカ政経学会全国大会』, 招待講演.

Ukeda, Hiroyuki(2017), “Peasants and Networks for Organic Agriculture Promotion: Participatory Guarantee System in Mexico,” *Pequenos*

productores y comerciantes locales de la globalizacion desde abajo, LASA (Latin American Studies Association), 2017 Congress, 招待講演, 国際学会.

Muramatsu, Mariko (2016), “La conoscenza della letteratura italiana in Giappone da Dante a D’Annunzio e Tabucchi,” *Italia-Giappone, influenze e scambi. Dalla storia alla letteratura, dal cibo alla moda e all’arte*, Università degli Studi di Bologna, Scuola Superiore di Studi Umanistici, 2016 年 10 月 24~25 日, ボローニャ, イタリア.

受田宏之(2016), 「組織犯罪と暴力の関係を理解する: 大衆歌謡の歌詞分析」第 53 回ラテン・アメリカ政経学会定期大会でのパネル報告、東京大学駒場キャンパス、2016 年 11 月.

Ukeda, Hiroyuki(2016), “Popular Image of Outlaws and the State: Organized Crime and Violence Seen Through Popular Songs” paper presented for the IV Congreso Internacional de Ciencia Política en México, Monterrey, August 2016.

中西徹(2016), 「有機農家丹野喜三郎さんの 5 年間の歩み」, シンポジウム『東日本大震災から 5 年: 人間の安全保障の視点からみた復興の課題』, 東京大学・大学院総合文化研究科(東京都目黒区), 2016 年 3 月 5 日(招待講演)

Ukeda, Hiroyuki(2016), “Tigres del Norte and Kitajima Saburo: Organized Crime and Violence Seen Through Popular Songs,” *LAINAC Workshop on the Future of Democracy after Neoliberalism*, 東京大学・大学院総合文化研究科(東京都目黒区), 2016 年 1 月 14 日(国際学会, 招待講演)

[図書](計 12 件)

受田宏之(2018), 「不法占拠と露天商の生命力: インフォーマリティの政治経済学」94~115 頁, 星野妙子編『21 世紀のメキシコ: 近代化する経済, 分極化する政治と社会』, 144 頁, アジア経済研究所.

松原隆一郎(2017), 『経済政策』, 276 頁, 放送大学教育振興会.

高橋巖・矢坂雅充(2017), 『地域を支える農協』, 299 頁, コモンズ.

青山和佳・受田宏之・小林誉明編(2017), 『開発援助がつくる社会生活 現場からのプロジェクト診断(第二版)』, 260 頁, 大学教育出版.

受田宏之(2017), 「嫌われる露天商や不法占拠者たち: インフォーマリティの政治経済学」, 星野妙子編『21 世紀のメキシコ 近代化する経済, 分極化する政治と社会』, アジア経済研究所, 2017 年 3 月, 94

~ 15 頁.

Muramatsu, Mariko and Manabu Ishikawa eds. (2017), *Food and Civil Society*, IHS, University of Tokyo, 113 pages.

中西徹(2016), (大野拓司ほかと共著)『フィリピンを知るための63章』, 408 頁, 明石書店.

小池百合子・松原隆一郎(2015), 『無電柱化革命』, 241 頁, PHP 研究所.

中西徹(2015), 「第2章・弱者の戦略: 市場に抗する有機農業」(内田隆三編『現代社会と人間への問い』473 頁), 43~70 頁, せりか書房.

マキト, フェルディナンド・中西徹(2016), 「第5章・フィリピン経済」(トラン・ヴァン・トゥ編『ASEAN 経済新時代と日本』370 頁), 129~155 頁, 文眞堂.

長谷部美佳・受田宏之・青山亨共編(2016), 『多文化社会読本 多様な世界、多様な日本』(264 頁), 東京外国語大学出版会.

Ceballos, Atilano, Hiroyuki Ukeda, Toru Nakanishi et. al.(2015), *Otra Economia es Posible*, 47 pages, U Yits Ka'an, Yucatan, Mexico.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松原 隆一郎 (MATSUBARA, Ryuichiro)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 90181750

(2) 研究分担者

中西 徹 (NAKANISHI, Toru)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 30227839

矢坂 雅充 (YASAKA, Masamitsu)
東京大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号: 90191098

(3) 連携研究者

村松 真理子 (MURAMATSU, Mariko)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 80262062

受田 宏之 (UKEDA, Hiroyuki)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 20466816